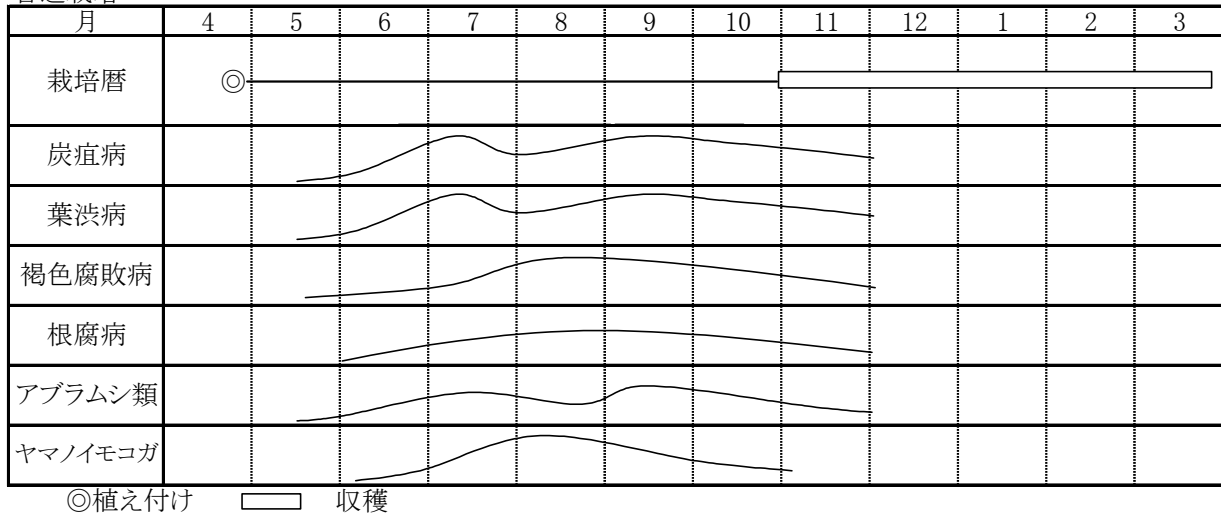


(34) ヤマノイモ

1 主要な作型及び病害虫の発病・加害時期

普通栽培



2 主要病害虫別防除方法

病害虫名 (病原体)	農薬によらない防除	農薬による防除
モザイク病 (JYMV)	<p>①種いも生産ほ場では、24メッシュ（1mm）より細かい目の防虫ネットなどで被覆する。</p> <p>②無病のいもを種いもとして用いる。</p> <p>③二次感染を避けるため、発病株は発見次第除去する。</p> <p>【参考事項】 他に、ソラマメウルトウイルス(BBWV)、ヤマノイモネモザイクウイルス(CYNMV)、Yam mild mosaic virus(YMMV)によるウイルス病があるが、いずれもアブラムシ類によって非永続的に伝搬する。BBWV、CYNMVはジネンジョでは発生が確認されていない。 種いもでも伝染する。</p>	<p>①媒介昆虫であるアブラムシ類を防除する(アブラムシ類の項を参照)。</p>
炭疽病 (<i>Gloeosporium</i>)	<p>①急激な肥料切れを起こさないように、適度の追肥を行う。</p> <p>②肥培管理を適正にし、過繁茂にしない。</p> <p>③密植栽培を避け、風通しを良くする。</p> <p>④被害茎葉は処分する。</p> <p>⑤支柱などの資材を再度使用する場合は、消毒してから使用する。</p> <p>【参考事項】 病原菌は、被害茎葉上に菌糸の形で越冬し、翌年の伝染源になる。 支柱などの資材に付着して伝染源になることも考えられる。 病斑上の黒色小粒点は分生孢子層である。分生孢子は水滴や雨水とともに飛散し、表皮や傷口から侵入して、二次伝染を繰り返す。 降雨が多いと多発する。 盛夏期は病勢が一時停滞する。 水不足や肥料切れなどで茎葉が弱ると、発生が多くなる。</p>	<p>①予防主体に農薬を散布する。 雨が多く多発が予想されるときは、発病前から10日おきぐらいに散布する。 同一農薬は連続して散布しない。</p> <p>(例) イミノクタジナルベシル酸塩水和剤（ベルコートフロアブル） チオファネートメチル水和剤（トップジンM水和剤） チオファネートメチル・マンゼブ水和剤（ラビライト水和剤） 銅水和剤（Zボルドー） マンゼブ水和剤（ジマンダイセン水和剤、ペンコゼブ水和剤） TPN水和剤（ダコニール1000）</p>
葉渋病 (<i>Cylindrosporium</i>)	<p>①連作を避ける。</p> <p>②被害茎葉は処分する。</p> <p>③支柱などの資材を再度使用する場合は、消毒してから使用する。</p>	<p>①予防主体に農薬を散布する。 多発が予想されるときは、発病前から10日おきぐらいに散布する。 下葉や葉裏にも薬液がかかるように散布する。 同一農薬は連続して散布しない。</p> <p>(例) イミノクタジナルベシル酸塩水和剤（ベルコート水和剤、ベルコートフロアブル） クレソキシムメチル水和剤（ストロビーフロアブル） フルアジナム水和剤（フロンサイドSC） マンゼブ水和剤（ジマンダイセン水和剤、ペンコゼブ水和剤）</p>

病害虫名 (病原体)	農薬によらない防除	農薬による防除
葉渋病 (<i>Cylindrosporium</i>) つづき	<p>【参考事項】</p> <p>病原菌は、胞子層や菌糸の形で被害植物について越年、これより分生胞子を形成して伝染する。支柱などの資材に付着して伝染源になることも考えられる。病斑上の分生胞子が二次伝染を繰り返す。梅雨期及び秋に降雨が多いと多発する。高温の盛夏期には、病勢は一時停滞する。盛夏期でも冷涼で降雨が多いと、梅雨期から連続して発生し続ける。</p>	
褐色腐敗病 (<i>Fusarium</i>)	<p>①連作を避ける。</p> <p>②種いもは健全ないもを選別して用いる。ただし、発生ほ場のいもは、たとえ健全であっても用いない。</p> <p>③種いもの切断部は、消石灰又は木灰を粉衣する。</p> <p>④多肥栽培を避ける。</p> <p>⑤排水対策を行う。</p> <p>⑥収穫時には、作物残さ、特に被害いもを処分する。</p> <p>【参考事項】</p> <p>病原菌は、厚膜胞子の形で長期にわたり土壤中に残存する。連作によって土壤中の菌密度が高まり、土壤消毒をしないと年々発生が増加する。高温を好むので、春から夏にかけて高温が続き地温が高い年に発生が多い。冷涼な気象の年では病斑が少なく、いもの上部に病徴が多く現れる傾向がある。</p>	<p>①作付け前に土壤消毒・土壤混和する(土壤病害虫の防除法の項参照)。(例) クロルピクリンくん蒸剤(クロールピクリンなど) ダゾメット粉粒剤(ガスタード微粒剤、バスマイド微粒剤) メチルイソチオシアネート・D-D油剤(ディ・トラベックス油剤)</p> <p>②種いも浸漬処理をする。(例) チウラム・ベノミル水和剤(ベンレートT水和剤20)</p>
根腐病 (<i>Rhizoctonia</i>)	<p>①連作を避ける。</p> <p>②種いもは、無病ほ場で生産されたものを用いる。</p> <p>③土壌pHが低いほ場は発生が多い傾向があるので、苦土石灰などでpH6～7を目標に改良する。</p> <p>④被害残さを処分する。</p> <p>⑤深植えする。</p> <p>⑥むかごから養成した種いもは、首部に病原菌が潜在している割合が高いので、首部を除いて使用する。</p> <p>【参考事項】</p> <p>ニンジン、ダイコンなども侵す。土壤中では、菌糸又は菌核を形成して生存する。第一次伝染源は、前年の被害植物などとともに土壤中で越年した菌核や菌糸、あるいは種いもに付着した菌核や菌糸と考えられる。菌糸の生長は速く、特にむかごからの種いも養成栽培では、発病株から隣接株に伝染して次々に立枯れを起こす。発病は13～28℃の広い温度範囲で起こる。一般に高温年に被害が大きい。</p>	<p>①作付け前に土壤消毒・土壤混和する(土壤病害虫の防除法の項参照)。(例) クロルピクリンくん蒸剤(クロールピクリンなど) ダゾメット粉粒剤(ガスタード微粒剤、バスマイド微粒剤)</p> <p>②種いも浸漬処理をする。(例) チウラム・ベノミル水和剤(ベンレートT水和剤20)</p>
アブラムシ類	<p>①種いも生産ほ場では、24メッシュ(1mm)より細かい目の防虫ネットなどで被覆する。</p> <p>【参考事項】</p> <p>ウイルス病を媒介する。ジャガイモヒゲナガアブラムシ、ワタアブラムシが主に寄生する。新梢や葉にむらなく寄生するが、密なコロニーを形成することはないので、吸汁による直接害は少ない。ウイルス病のまん延を防止するためには、防除の徹底が必要である。</p>	<p>①発生初期から農薬を散布する。ウイルス病を伝播するので、発生初期から防除を徹底する。萌芽期～7月中旬の発生時に、農薬による防除を行う。(例) アセタミプリド水溶液(モスピラン顆粒水溶液) イミダクロプリド水和剤(アドマイヤー顆粒水和剤) シアントラニリプロール水和剤(ベネビアOD) ピリフルキナゾン水和剤(コルト顆粒水和剤)</p>
ヤマノイモコガ	<p>①肥培管理を適正にし、過繁茂にしない</p> <p>②密植栽培を避け、風通しを良くする。</p> <p>【参考事項】</p> <p>越冬態は成虫と考えられている。発芽すると同時に寄生し、6～7月に発生が多くなり各態が混発するようになる。夏は減少するが、秋に再び多くなる。年間の発生回数は3～4回程度と考えられる。幼虫は、老熟すると葉裏や支柱ネットの糸上で、網目状のまゆを作って蛹化する。</p>	<p>①発生初期から農薬を散布する。年間を通じて発生するので、定期的な散布を行うが、とくに分枝づるが始める時期の7月中旬の防除が重要である。(例) エトフェンプロックス乳剤(トレボン乳剤) ペルメトリン乳剤(アディオソ乳剤)</p>